

主 題：教会が教会であるために2

聖書箇所：ペテロの手紙第一 5章5－7節

この5章には9つの命令が記されています。今回は1－4節からその中の一つを学びました。

A. 羊を牧しなさい：長老たちに対する命令

羊を養い、世話をし、導き、保護しなさい、そのために、霊的リーダーとして失敗しないための三つの秘訣を学びました。・長老の務めを知ること ・務めを全うする方法を知ること ・自分の責任を知ることでした。そして、そのときに長老たちにはすばらしいほうびが約束されている、栄光の冠が用意されているとペテロは教えました。神は長老だけでなく、神に忠実に歩んだしもべに祝福を与えてくださいます。それが「いのちの冠」であり、「義の冠」「朽ちない冠」です（前回の最後を参照）。
続いて、5節から学んでゆきます。

B. 長老に従いなさい：若者たちへの命令 5 a 節

「同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。」

「従う」とは「下に」と「配置する」ということばが合わさったことばです。自分の意志で自分を下に置く、服従することです。ここでの従順とは「リーダーに対する不満」と反対の意味を持ちます。自らを長老たちの下に置いて従って行くことです。「若者たち」とは、年若いメンバーとの比較で年の若いメンバーたちです。信仰生活の長い短いではありません。

★どうして「若者たち」だけにこのことが命じられているのでしょうか？

それは、彼らが信仰的に未熟だからです。長老たちと対照的に記されているのです。その比較において彼らは教えられてゆくことが必要なのです。長老たちは霊的な人たちです。つまり、みことばを知り、そのみことばから神を、神のみこころを知りそれに従って歩んでいる人たちです。その選択においてもみことばに沿って判断できるのです。しかし、「若者たち」は教会にも新しく、みことばも、また主のこともよくわかっていない、だから、教えられることが必要なのです。若者以外の人たちはそのような歩みをしてきたのです。この長老たち、執事たちに従うという教えは聖書が教えていることで、教会はそのようなところでは「従う」ことはすべてのクリスチャンに与えられている教えです。

使徒ヨハネの弟子であるポリカプという人物、彼は紀元65－155年生き、155年の2月に殉教したスミルナ教会の主教でした。彼はピリピ教会に宛てて手紙を書いています。「ポリカプの手紙」といわれるものです。14章に渡るその手紙の中の5章に「執事たち、また若者たち、乙女たちの責任」というタイトルで記されているところに、ペテロと同じように「若者たち」、「従う」ということばを用いて、彼は「若者は神とキリストに従うように長老と執事に対して従順であるように」と教えています。初代教会の責任者がこのように教えていることを見ても、教会の秩序は重んじられるべきものだという事を私たちは学ぶべきです。教会は霊的リーダーにみこころを示されるから、若者たちよ、今すぐ、自ら進んで「従う」という態度をもって長老に従って行きなさい、それが教会の中で必要なことだと、ペテロは強調して教えるのです。

C. 謙遜を身につけなさい：すべての人たちに対する命令 5 b 節

三つ目の命令です。「みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。」とあります。「みな互いに」とは教会のすべての人がすべての人に対してこのようにふるまいなさいということです。教会員はお互いに対して「謙遜」でなければならないと教えるのです。

1. 「謙遜」とは？

謙遜であることが神に喜ばれることだと私たちはよく分かっています。もっと謙遜でなければならないと私たちはよく口にします。しかし、「謙遜」ということばを聖書が教えるとおりに理解しているかどうか考えなければなりません。この「謙遜」はマタイ5：5にある「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。」と同じことです。謙遜な者には神の祝福があるのです。

1) 間違った謙遜：出しゃばらずに控えめな人、自己卑下すること、私は何もできないのです、愚かなのですというような人がいかにも謙遜であると思っているかもしれません。ペテロはそのような意味で「謙遜」ということばを使ったのでしょうか？そうではありません。

2) 正しい謙遜：ではペテロがいう「謙遜」とはどのような意味でしょう？

聖書辞典からこの「謙遜」を見ると、〔困窮や貧しさや苦難の中で「苦しんでいる」、「屈服させられた」状態を表わすことば、そこから「へりくだった」、「心砕かれた」、「柔和な」態度を意味する謙

遜が派生した。これは単なる徳目ではなく、苦しみや貧しさの中で神のみに頼らざるを得ないことを知り、そのように生きている人の態度のことである。]とあります。旧約聖書を見たときにこの「謙遜」ということばがどのように用いられるようになったのかというと、もう神以外の何ものも頼ることができない、そのような苦しみ、悩みの中で神に頼ることを学んで実践している人、このような人を「謙遜」な人と呼ぶようになったというのです。神のみに頼らざるを得ないことを知り、そのように生きている人の態度、それが「謙遜」だと言います。

みことばから見ましょう。「謙遜」ということばはいろいろなところで使われていますが、その中のひとつ、ピリピ2：3-4を見ましょう。「**何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。：4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。**」と、この「へりくだって」ということばがペテロが使った「謙遜」と同じことばです。このみことばは「謙遜」というものがどういうものであるかを私たちに教えています。

○それは、利己的ではない、見栄を張りたがるのでもない、⇒それは教会を壊します。なぜならパウロは、このピリピ2：2で「**私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。**」と教会が一つになって行くために必要なことを教えています。利己的な考えや生き方をしてはならないと。ではどうすれば良いのか、パウロは言います。

○謙遜というのは互いに人を自分より勝っていると考え、⇒社会的地位などに関係なく、どのような人にもすべての兄弟姉妹に対して私たちが思うことは自分よりすぐれた者だということです。

○謙遜とは自分の利益ではなく他の人に仕える機会を追求することだと4節で教えています。

つまり、聖書が教える「謙遜」は、自分のことよりも人に仕えて行こうとする、人がもっと神を喜ぶ者となるように、もっと神を愛する者となるように、もっと感謝と喜びに満ちあふれた者となるように私は仕えて行こうとすることです。パウロはそのことを教えているのです。

2. 「身に着ける」とは？

「身に着けなさい」とペテロは大切なことばを使っています。これは「結び」とか「結び目」ということばから来ています。つまり自分のからだに結びつけるとか、いつも身にまとう、着るということです。この当時、奴隷たちは自由民と見分けがつくように白いエプロンを身に着けていました。その意味なのです。奴隷たちは自分が仕える者であることを明らかにしたのです。あなたたちは奴隷でないかもしれないが、そのような心の態度、仕える者としての態度が必要なのだ、それをしっかりあなた自身に巻きつけなさい、結び付けなさいというのです。そのように謙遜を身に着けなさいと教えるのです。

実はペテロはこの教えをイエスから学んでいるのです。最後の晩餐のとき、イエスは弟子たちといっしょに食事をするために集まりましたが、弟子たちはだれも隣の人の足を洗おうとしなかった、しもべの役目を果たそうとはしませんでした。そのとき、イエスは「**夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。**」のです。そして、「**それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとしておられる手ぬぐいで、ふき始められた。**」(ヨハネ13：4、5)と、ペテロは間違いなくこのことを覚えていたのです。神が奴隷、しもべとなられたのです。イエスは「手ぬぐいを取って腰にまわれ、弟子たちの足を洗い…」と自らしもべとして人々に仕えられたのです。そして、そのあと、「わたしはあなたがたに模範を示した」と言われました(15節)。この態度をもって教会の中であって兄弟姉妹たちに仕えて行きなさいというのです。

3. なぜそのように生きるのか？

「**神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。**」、実はこの前には、なぜそのように生きるのかというその理由が説明されていることを示すことばが原語にはあるのです。「**神は高ぶる者に敵対し、**」とはそのように生きて行くことの原因です。

1) 神は高慢を憎まれているから：「高ぶる」とは「上に現われる」こと、「謙遜」と違って「その上に自らを置くこと」です。これは高慢であるとか、横柄な態度、周りの人を軽蔑する、侮る、人をバカにするといった意味をもつことばです。身分とか階級を意識して威張った人、言動が横柄で傲慢で、威張って無礼な、生意気な人です。神のことをいっさい気につけない、人に対して威張りちらし、誇らしげに人を見下す人です。このような人は人より自分が重要だと思っているのです。なぜ神がこのような人に敵対されるのか、喜ばれないのか、それはこの人たちは常に自分の力や知恵に頼るからです。自分に自信があるのです。自分を誇り神を必要としません。そして、それが達成できたとき、実は神のあわれみによってできたのに、自分自身でやったと行って神に栄光を帰そうとしないのです。ゆえに神はこのような行為を喜ばれないし、このような人を受け入れられないのです。私たちは気をつけなければなりません。私たちが日々行なっているすべてのことは神のあわれみのうちに為していることです。神が力を与えてくださっていることを覚えるべきです。神は「高ぶる」者に継続して敵対し続けるといわれ

ます。現在形が使われています。みことばを見ましょう。

1 コリント 1 : 26 - 31 「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんください。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。:27 しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。:28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。:29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。:30 しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました。:31 まさしく、「誇る者は主にあって誇れ。」と書かれているとおりになるためです。」

黙示録 4 : 11 「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」

2) 神は謙遜を愛されているから : 「へりくだる者に恵みを与えられるからです。」、「恵み」とは私たちが受けるにふさわしくない神のご好意です。私たちが受けるにふさわしくない救いを神は一方的に恵みによって与えてくださり、さらに、私たちの日々の信仰生活において、神に喜ばれる生き方をして行くことができるようにその力となるのもこの恵みです。神の恵みによって、神の備えてくださる力によって神が望んでおられることを行なってゆくことができる、これが恵みによって生きるということです。ペテロは私たちに教えます。私たちが自分のことより人のことを考え、人から何かを期待するよりも、人の必要のために仕えること、すなわち、本当の謙遜を身に着けると、神は私たちに大いなる祝福を与えてくださるのです。それは、信仰の成長であり、私たちが天に上がったとき神から大きな祝福をいただくことです。

D. へりくだりなさい (神に対して) : すべての人たちに対する命令 6 - 7 節

1. 「神に対する謙虚さ」とは？

それは「へりくだった」心の態度です。それには、

1) 神を正しく知る

6 節 「**ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。**」と、神が全能のお方であることを教えています。「力強い」というこの形容詞は神の御手が力あるものであることを教えます。この表現は新約聖書にはここにだけ記されています。70人訳(ヘブル語旧約聖書のギリシャ語訳)においては「人々の間における神の働き」を表わすよく知られた表現です。神のあわれみの行為、さばきの行為です。申命記 3 : 24 に「**神、主よ。あなたの偉大さと、あなたの力強い御手とを、あなたはこのしもべに示し始められました。あなたのわざ、あなたの力あるわざのようなことのできる神が、天、あるいは地にあるでしょうか。**」と、力強いみことばがあります。このような力ある方はどこにも見つけることはできません。私たちが崇拝している神は大能の方、どんなことでもできるのです。ですから、私たちが神に対して「へりくだる」という命令を受けたとき、まず神とはどういう方なのかを知ることが大切です。私たちは余りにも神について知らなすぎます。神は愛だ、全能だと言っても、その愛が、全能がどのようなものかよく分かっていないのです。私たちはこの聖書を通して神がどのようなお方かを真に知ることで、神の前にへりくだる思いが自ずと生まれてくるのです。

2) 自分を正しく知る

同時に、神を知るほどに私たちは自分がどのような者かを知らされて来ます。人と自分を比較するのではなく、神が私をどう見ておられるかです。正しい神の目から自分を見ることです。そのとき見えてくるのは、自分の罪深さ、愚かさ、不忠実さです。パウロが言ったように、ほんとうに私はみじめな人間ですと、それに気づくのです。同時に、このような者を救ってくださった神の救いを感謝します。そして、そのとき私たちはこの「へりくだり」を経験するのです。

2. なぜ神に対してへりくだるのか？

6 b 節「**神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。**」

1) 祝福 : 神が「高くしてくださる」

敬虔に神の前にへりくだって歩むなら、神がその人を祝してくださる、高くしてくださると言います。謙遜の極みを歩まれたイエスを神が高く上げられたように、主に対してへりくだった者を神は忘れることがありません。ピリピ 2 : 6 - 9 を見てください。「**キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることのできないとは考えないで、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。:8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。:9 それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。**」

そして、「ちょうど良い時に、」、神が定められた時に神がその人を高めてくださるのです。神が高めてくださるとはどういうことでしょうか？私たちが天にあってすばらしい祝福をいただくこともそうで

すが、同時にこの地上にあって、神は私たちがキリストに似た者へと変えていってくださる、それを見る周りの人々に、この人たちが信じている神は生きて働かれるまことの神だということが明らかにされるのです。

3. 神に対してへりくだった人の特徴 7節

神の前にへりくだった人はこのような生き方をします。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」。

1) 神への信頼をもっている

「思い煩い」をいっさい神に委ねる、神にすべてを委ねて歩むような者へと変えられて行くのです。なぜなら、神がどんなに偉大な方が分かっているからです。本当にへりくだるためには神がどのような方が、自分がどのような者かが分かってくるとそれはできないことです。そして、神に信頼して行こうとします。「思い煩い」とは「心配」とか「心づかい」と新約聖書では訳されていることばです。

マタイ 6 : 25 - 34、山上の説教でイエスはこのことばを「心配」と言っています。「だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。:26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。:27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。:28 なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまなさい。働きもせず、紡ぎもしません。:29 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。:30 きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくして下さらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。:31 そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。:32 こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。:34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」と、ここで「心配」と訳されていることばがこの「思い煩い」なのです。

同じように、マタイ 13 : 22には「また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。」とあり、これも「思い煩い」です。この「思い煩い」ということばの根本的な意味は、分割する、分裂するで、そこから心配する、不安、気を散らすという意味をもつことばになりました。そうすると、「思い煩い」が私たちクリスチャンに何をもちたかという、クリスチャンが神に対して献身的、忠実に歩み続けることを妨げる、また、気を散らすようなこの世の生活にある心配、不安、気がかりに向けさせようとする、神のことから他のものへ心に向けさせようとするのです。そのとき、私たちの周りにある心配を見始めると、神のことを忘れてそのようなことに心奪われてしまいます。だから、問題なのです。私たちの目を神から離してこの世のものに向けさせるのです。健康のこと、家族のこと、仕事、老後の生活、お金、学校、子どものことと心配すると際限がありません。このようなことに私たちの心が奪われてしまうと、それが「思い煩い」となるのです。だから、イエスは弟子たちにこのように警告されました。ルカ 21 : 34 「あなたがたの心が、放蕩や深酒やこの世の煩いのために沈み込んでいるところに、その日がわなのように、突然あなたがたに臨むことのないように、よく気をつけていなさい。」と。私たちはすべて神の御手のうちにあることを覚えるべきです。

パウロはⅡコリント 11 : 28で「このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。」とパウロは教会のことを考えて「心づかい」があると言っています。これは私たちも同じことですが、自分の力ではできないことをしようとするからそれが自分には思い煩いとなって、心に平安がなくなり不安でいっぱいになってきます。それをもち続けていると心が渴いて来ます。

「神さま、いっさいあなたにゆだねます」となったとき平安が訪れるのです。

「いっさい神にゆだねなさい」ということばは、イエスがエルサレムへ入城されたとき弟子たちは上着をロバの上に置きましたが、この行為、上着を敷いたという、このことなのです。ルカ 19 : 35 「そしてふたりは、それをイエスのもとに連れて来た。そして、そのろばの子の上に自分たちの上着を敷いて、イエスをお乗せした。」。「私のすべての心配ごと、思い煩いは神さま、全部あなたの上に乗せます」ということです。そして、この「ゆだねる」という動詞は精力的・活気に満ちた行動を意味します。すべてをイエスにゆだね、神の最善がなされますようにと神の御手に預けてゆくこと、それは大切な信仰者の歩みです。それがただの気休めでない証拠が7節の後半にあります。

2) 信頼

神を「信頼」すること、それが神に委ねることが愚かな気休めでないことの証拠なのです。「**神があなたがたのことを心配してくださるからです。**」とあります。神にゆだねることができるということはクリスチャンにとって素晴らしい特権です。「心配してくださる」、この「心配」ということばは、配慮するとか、考慮するとか、愛情と思いやりにあふれた不眠の世話のことです。このように神は私たちに為してくださるのです。そして、「心配してくださる」と現在形ですから、継続して心配し続けてくださるというのです。神はそのようなお方です。疲れることなく不眠不休でそのようにしてくださるのです。私たちに解決できなくても神は解決を与えてくださるのです。心配を持ち続けて生きるのか、心配を神にゆだねて平安に生きるのか、その選択はこの「思い煩い」をどうするのかに掛かっているのです。

弟子たちがガリラヤ湖に船を出したとき、激しい突風に見舞われました。マルコ4：37-40を見ましょう。「**すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって水でいっぱいになった。：38ところがイエスだけは、ともものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか。」：39 イエスは起き上がって、風をしかりつけ、湖に「黙れ、静まれ。」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。：40 イエスは彼らに言われた。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことですか。」：41 彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った、「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」**」。弟子たちは「**私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか。」**とイエスを責めます。イエスがこの後、波を風をしかりつけると大なぎになりました。神は私たちのことを忘れてはおられません。私たちのことを思ってくださっているから、私たちはこの方にゆだねて生きることができるのです。

神は知恵においても、力においても、あわれみにおいても、愛においても、恵みにおいても、すべてにおいて完全なお方です。私たちはこのお方にゆだねることができる、そのような恵みを神は私たちにくださったのです。なぜ、自分で心配し続けるのでしょうか？なぜ、自分の力ですべてを解決しようとするのでしょうか？私たちにできないのです。救いも私たちの力で得ることはできなかった、信仰生活も神の助けがなければできない、それなのに、なぜ問題を自分の力で解決しようとするのですか？あなたのことを心配し、あなたに代わって解決してくださる方がいらっしゃるのです。その方にゆだねて生きることができるのです。

神はこのようなことを教会に、そしてあなたに望んでおられます。クリスチャンの皆さん、このようにあなたが歩むときあなたは変えられて行きます。しっかり神を見上げて歩んでください。まだイエスを救い主と信じておられない方は、神を拒み続ける罪の人生を止めて、この救い主を、この偉大な主をあなたの主として新しい人生を歩んでください。